みさごの鮨

泉鏡花

一

「旦那（だんな）さん、旦那さん。」

目と鼻の前（さき）に居ながら、大きな声で女中が呼ぶのに、つい箸（はし）の手をとめた瘦形（やせがた）の、年配で——浴衣に貸広袖（かしどてら）を重ねたが——人品のいい客が、

「ああ、何だい。」

「どうだね、おいしいかね。」

と額で顔を見て、その女中はきょろりとしている。

客は余り唐突（だしぬけ）なのに驚いたようだった。——少い経験にしろ、数の場合にしろ、旅籠（はたご）でも料理屋でも、給

仕についたものから、こんな素朴な、実直な、しかも要するに猪突(ちょとつ)な質問を受けた事はかつてない。

ところで決して不味(まず)くはないから、

「ああ、おいしいよ。」

と言ってまた箸(はし)を付けた。

「そりゃ可(い)い、北国(ほっこく)一だろ。」

と洒落(しゃれ)でもないようで、納まった真顔である。

「むむ、……まあ、そうでもないがね。」

と今度は客の方で顔を見た。目鼻立は十人並……と言うが人間並で、色が赤黒く、いかにも壮健(じょうぶ)そうで、口許(くちもと)のしまったは可(い)いが、その唇の少し尖(とが)った処が、

化損（ばけそこな）った狐のようで、しかし不気味でなくて愛嬌（あいきょう）がある。手織縞（ておりじま）のごつごつした布子（ぬのこ）に、よれよれの半襟で、唐縮緬（とうちりめん）の帯を不状（ぶざま）に鳩胸に高くしめて、髪はつい通りの束髪に結っている。

これを更（あらた）めて見て客は気がついた。先刻（さっき）も一度その（北国一）を大声で称（とな）えて、裾短（すそみじか）な脛（すね）を太く、臀（しり）を振って、ひょいと踊るように次の室（ま）の入口を隔てた古い金屏風（きんびょうぶ）の陰へ飛出して行ったのがこの女中らしい。

ところでその金屏風の絵が、極彩色の狩野（かのう）の何某（なにがし）在銘で、玄宗皇帝が同じ榻子（いす）に、楊貴妃（ようきひ）ともたれ合って、笛を吹いている処だから余程可笑（よっぽどおか）しい。

それは次のような場合であった。

客が、加賀国山代（やましろ）温泉のこの近江屋（おうみや）へ着いたのは、当日午（ひる）少し下る頃だった。玄関へ立つと、面長で、柔和（やわら）かなちっとも気取（きど）りっけのない四十ぐらいな——後で聞くと主人だそうで——質素な男が出迎えて、揉手（もみで）をしながら、御逗留（ごとうりゅう）か、それともちょっと御入浴で、と訊（き）いた時、客が、一晩お世話に、と言うのを、腰を屈（かが）めつつ畏（かしこま）って、どうぞこれへと、自分で荷物を捌（さば）いて、案内をしたのがこの奥の上段の間で。次の室（ま）が二つまで着いていている。あいにく宅は普請中でございますので、何かと不行届（ふゆきとどき）の儀は御容赦下さいまして、ま

ず御緩(ごゆっく)りと……と丁寧に挨拶(あいさつ)をして立つと、そこへ茶を運んで来たのが、いま思うとこの女中らしい。

実は小春日(こはるび)の明(あかる)い街道から、衝(つ)と入ったのでは、人顔も容子(ようす)も何も分らない。縁を広く、張出しを深く取った、古風で落着いただけに、十畳へ敷詰めた絨毯(じゅうたん)の模様も、谷へ落葉を積んだように見えて薄暗い。大きな床の間の三幅対(さんぷくつい)も、濃い霧の中に、山が遥(はるか)に、船もあり、朦朧(もうろう)として小さな仙人の影が映(さ)すばかりで、何の景色だか、これは燈(あかり)が点(つ)いても判然(はっきり)分らなかったくらいである。が、庭は赤土に薄日がさして、塔形の高い石燈籠(いしどうろう)に、苔(こけ)の真蒼(まっさお)なさびがある。ここに一樹、

思うままの松の枝ぶりが、飛石に影を沈めて、颯（さっ）と渡る風に静寂な水の響（ひびき）を流す。庭の正面がすぐに切立（きったて）の崖で、ありのままの雑木林に萩つつじの株、もみじを交ぜて、片隅なる山笹の中を、細く蜿（うね）り蜿り自然の大巌（おおいわ）を削った径（こみち）が通じて、高く梢（こずえ）を上（あが）った処に、建出しの二階、三階。はなれ家の座敷があって、廊下が桟（かけはし）のように覗（のぞ）かれる。そのあたりからもみじ葉越しに、駒鳥（こまどり）の囀（さえず）るような、芸妓（げいしゃ）らしい女の声がしたのであったが——

入交（いれかわ）って、歯を染めた、陰気な大年増が襖際（ふすまぎわ）へ来て、瓶掛（びんかけ）に炭を継いで、茶道具を揃えて銀瓶を掛けた。そ

こが水屋のように出来ていて、それから大廊下へ出入口に立てたのが件（くだん）の金屏風。すなわち玄宗と楊貴妃で、銀瓶は可（い）いけれども。……次にまた浴衣に広袖（どてら）をかさねて持って出た婦（おんな）は、と見ると、赭（あか）ら顔で、太々（だいだい）とした乳母（おんば）どんで、大縞のねんね子半纏（ばんてん）で四つぐらいな男の児（こ）を負（おぶ）ったのが、どしりと絨毯に坊主枕ほどの膝をつくと、半纏の肩から小児（こども）の顔を客の方へ揉出（もみだ）して、それ、小父（おじ）さんに（今日は）をなさいと、顔と一所に引傾（ひっかた）げた。

　学士が驚いた――客は京の某大学の仏語（ふつご）の教授で、榊（さかき）三吉と云う学者なのだが、無心の小児に向っては、

盗賊もあやすと言う……教授でも学者でも同じ事で、これには莞爾々々(にこにこ)として、はい、今日は、と言った。この調子で、薄暗い広間へ、思いのほかのものが顕(あらわ)れるから女中も一々どれが何だか、一向にまとまりが着かなかったのである。

昼飯(ひる)の支度は、この乳母(うば)どのに誂(あつら)えて、それから浴室へ下りて一浴(ひとあみ)した。……成程、屋の内は大普請らしい。大工左官がそちこちを、真昼間(まっぴるま)の夜討(ようち)のように働く。……ちような、鋸(のこぎり)、鉄鎚(かなづち)の賑(にぎや)かな音。——また遠く離れて、トントントントンと俎(まないた)を打つのが、ひっそりと聞えて谺(こだま)する……と御馳走(ごちそう)に鶫(つぐみ)をたたくな、

とさもしい話だが、四高（金沢）にしばらく居たことがあって、土地の時のものに予備知識のある学者だから、内々御馳走を期待しながら、門から敷石を細長く引込んだもとの大玄関を横に抜けて、広廊下を渡ると、一段ぐっと高く上る。座敷の入口に、いかにも（上段の間）と札に記してある。で、金屏風の背後（うしろ）から謹んで座敷へ帰ったが、上段の室（ま）の客にはちと不釣合な形に、脇息（きょうそく）を横倒しに枕して、ごろんとながくなると、瓶掛の火が、もみじを焚（た）いたように赫（かッ）と赤く、銀瓶の湯気が、すらすらと楊貴妃を霞ませる。枕もとに松籟（しょうらい）をきいて、しばらく理窟も学問もなくなった。が、

ふと、昼飯(ひる)の膳(ぜん)に、一銚子(ひとちょうし)添えさせるのを言忘れたのに心づいて、そこで起上(たちあが)った。

どこを探しても呼鈴(よびりん)が見当らない。

二三度手を敲(たた)いてみたが——これは初めから成算がなかった。勝手が大分(だいぶ)に遠い。座敷の口へ出て、敲いて、敲きながら廊下をまた一段下りた。

「これは驚いた。」

更に応ずるものがなかったのである。

一体、山代の温泉のこの近江屋は、大まかで、もの事おっとりして、いま式に余り商売にあせらない旅館だと聞いて、甚だ嬉しくて来たのであるが、これでは

余り大まか過ぎる。

何か、茸（きのこ）に酔った坊さんが、山奥から里へ迷出たといった形で、手をたたき、たたき、例の玄関の処へ出て、これなら聞えようと、また手を敲こうとする足許（あしもと）へ、衝立（ついたて）の陰から、ちょろりと出たのは、今しがた乳母どのにおぶわれていた男の児で、人なつッこく顔を見て莞爾々々（にこにこ）する。

どうも、この鼻尖（はなさき）で、ポンポンは穏（おだやか）でない。

仕方なしに、笑って見せて、悄々（すごすご）と座敷へ戻って、

「あきらめろ。」

で、所在なさに、金屏風の前へ畏（かしこま）って、吸子（きゅうす）に銀

瓶の湯を注いで、茶でも一杯と思った時、あの小児にしてはと思う、大な跫足が響いたので、顔を出して、むこうを見ると、小児と一所に、玄関前で、ひょいひょい跳ねている女があった。

「おおい、姉さん、姉さん。」

どかどかどかと来て、

「旦那さんか、呼んだか。」

「ああ、呼んだよ。」

と息を吐いて、

「どうにかしてくれ。——どこを探しても呼鈴はなし、手をたたいても聞えないし、——弱ったよ。」

「あれ。」

と首も肩も、客を圧して、突込むように入って来て、

「こんな大(でけ)い内で、手を敲いたって何が聞えるかね。電話があるでねえか、それでお帳場を呼びなさいよ。」

「どこにある。」

「そら、そこにあるがね、見えねえかね。」

と客の前から、いきなり座敷へ飛込んで、突立状(つったちざま)に指(ゆびさ)したのは、床の間傍(わき)の、欞子(れんじ)に据えた黒檀(こくたん)の机の上の立派な卓上電話であった。

「ああ、それかい。」

「これだあね。」

「私はまたほんとうの電話かと思っていた。」

「おお。」

と目を円くして、きょろりと視て、

「ほんとの電話ですがね。どこか間違ったところでもあるのかよ。」

「いや、相済まん、……間違ったのは私の方だ。――成程これで呼ぶんだな。――分りました。」

「立派な仕掛だろがねえ。」

「立派な仕掛だ。」

「北国一だろ。」

――それ、そこで言って、ひょいひょい浮足で出て

行(ゆ)く処を、背後(うしろ)から呼んで、一銚子を誂えた。

「可(い)いのを頼むよ。」

と追掛けに言うと、

「分った、分った。」

と振り向いて合点(がってん)々々をして、

「北国一。」

と屏風の陰で腰を振って、ひょいと出た。——その北国一を、ここでまた聞いたのであった。

二

「まあ、御飯をかえなさいよ。」

「ああ……御飯もいまかえようが……」

さて客は、いまので話の口が解(ほど)けたと思うらしい面色(おももち)して、中休みに猪口(ちょく)の酒を一口した。……

「……姐(ねえ)さん、ここの前を右へ出て、大(おおき)な絵はがき屋だの、小料理屋だの、賑(にぎやか)な処を通り抜けると、旧街道のようで、町家(まちや)の揃った処がある。あれはどこへ行(ゆ)く道だね。」

「それはね、旦那さん、那谷(なや)から片山津(かたやまづ)の方へ行く道だよ。」

「そうか――そこの中ほどに、さきが古道具屋と、手

前が桐油菅笠屋の間に、ちょっとした紙屋があるね。雑貨も商っている……あれは何と言う家だい。」
「白粉や香水も売っていて、鑵詰だの、石鹼箱はぴかぴかするけど、じめじめとした、陰気な、あれかあね。」
「全くだ、陰気な内だ。」
と言って客は考えた。
「それは、旦那さん――あ、あ、あ、何屋とか言ったがね、忘れたよ。口まで出るけども。」
と給仕盆を鞠のように、とんとんと膝を揺って、
「治兵衛坊主の家ですだよ。」
「串戯ではない。紙屋で治兵衛は洒落ではないの

か。」

「何、人が皆そう言うでね。本当の名だか何だか知らないけど、治兵衛坊主で直（じ）きと分るよ。旦那さん、知っていなさるのかね、あの家を。」

客は、これより前（さき）、ちょっと買ものに出たのであった。——実は旅の事欠けに、半紙に不自由をしたので、帳場へ通じて取寄せようか、買いに遣（や）ろうかとも思ったが、式（かた）のごとき大まかさの、のんびりさの旅館であるから、北国一の電話で、呼寄せていいつけて、買いに遣って取寄せる隙（ひま）に、自分で買って来る方が手取早（てっとりばや）

い。……膳の来るにも間があろう。そう思ったので帽子も被（かぶ）らないで、黙（だんま）りで、ふいと出た。

直き町の角の煙草屋（たばこや）も見たし、絵葉がき屋も覗（のぞ）いたが、どうもその類のものが見当らない。小半町行（ゆ）き、一町行き……山の温泉（いでゆ）の町がかりの珍しさに、古道具屋の前に立ったり、松茸の香を聞いたり、やがて一軒見附けたのが、その陰気な雑貨店であった。浅い店で、横口の奥が山のかぶさったように暗い。並べた巻紙の上包（うわづつみ）の色も褪（あ）せたが、ともしく重ねた半紙は戸棚の中に白かった。「御免なさいよ、今日は、」と二三度声を掛けたが返事をしない。しかしこんな事は、金沢の

目貫(めぬき)の町の商店でも、経験のある人だから、気短(きみじか)にそのままにしないで、「誰か居ませんか、」と、もう一度呼ぶと、「はい、」とその時、媚(なまめ)かしい優しい声がして、「はい、」と、すぐに重ね返事が、どうやら勢(いきおい)がなく、弱々しく聞えたと思うと、挙動(こなし)は早く褄(つま)を軽く急いだが、裾(すそ)をはらりと、長襦袢(ながじゅばん)の艶(えん)なのが、すらすらと横歩きして、半襟も、色白な横顔も、少し俯向(うつむ)けるように、納戸から出て来たのが、ぱっと明るみへ立つと、肩から袖が悄(しお)れて見えて、温室のそれとは違って、冷い穴蔵から引出してでもしたようだった、その顔を背けたまま、「はい、何を差上げます。」と言う声が沈んで、

泣いていたらしい片一方の目を、俯向けに、紅入友染の裏が浅葱の袖口で、ひったり圧えた。

中脊で、もの柔かな女の、房り結った島田が縺れて、おっとりした下ぶくれの頬にかかったのも、もの可哀で気の毒であった。が、用を言うと、「はい、」と背後むきに、戸棚へ立った時は、目を圧えた手を離して、すらりとなったが、半紙を抽出して、立返る頭髪も量そうに褄さきの運びとともに、またうなだれて、堪兼ねた涙が、白く咲いた山茶花に霜の白粉の溶けるばかり、はらはらと落つるのを、うっかり紙にうけて、……はっと思ったらしい。……その拍子に、顔をかくす

と、なお濡れた。

うっかり渡そうとして、「まあ、」と気づいたらしく、

「あれ、取換えますから、」――「いや、宜しい。……」

懐中へ取って、ずっと出た。が、店を立離れてから、思うと、あの、しおらしい女の涙ならば、この袂に受けよう。口紅の色は残らぬが、瞳の影とともに玉を包んだ半紙はここにある。――ちょっとは返事をしなかったのもそのせいだろう。不思議な処へ行合せた、と思ううちに、いや、しかし、白い山茶花のその花片に、日の片あたりが淡くさすように、目が腫ぼったく、殊に圧えた方の瞼の赤かったのは、煩らっているの

かも知れない。あるいは急に埃（ほこり）などが飛込んだ場合で、その痛みに泣いていたのかも分らない。――そうでなくて、いかに悲痛な折からでも、若い女が商いに出てまで、客の前で紙を絞るほど涙を流すのはちと情に過ぎる。大方は目の煩いだろう。

　トラホームなぞだと困る、と、その涙をとにかく内側へ深く折込んだ、が。――やがて近江屋へ帰って、敷石を奥へ入ると、酒の空樽（あきだる）、漬もの桶（おけ）などがはみ出した、物置の戸口に、石屋が居て、コトコトと石を切る音が、先刻期待した小鳥の骨を敲（たた）くのと同一であった。

「――涙もこれだ。」

と教授は思わず苦笑して、

「しかし、その方が僥倖（しあわせ）だ。……」

今度は座敷に入って、まだ坐るか坐らないに、金屏風の上から、ひょいと顔が出て、「腹（おなか）が空いたろがね。」と言うと、つかつかと、入って来たのが、ここに居るこの女中で。小脇に威勢よく引抱（ひっかか）えた黒塗（くろぬり）の飯櫃（めしびつ）を、客の膝の前へストンと置くと、一歩（ひとあし）すさったままで、突立（つった）って、熟（じっ）と顔を瞰下（みおろ）すから、この時も吃驚（びっくり）した目を遣ると、両手を引込めた布子の袖を、上下に、ひょこひょことゆさぶりながら、「給仕をするかね、」と言っ

たのである。

教授はあきらめて落着いて、

「おいおいどうしてくれるんだ――給仕にも何にもまだ膳が来ないではないか。」

「あッそうだ。」

と慌てて片足を挙げたと思うと、下して片足をまた上げたり、下げたり。

「腹が空いたろで、早くお飯（まんま）を食わせようと思うたでね。急（せ）いたわいな、旦那さん。」

と、そのまま跳廻（はねまわ）ったかと思うと。

「北国一だ。」

と投げるように駈(か)け出した。

酒は手酌が習慣(くせ)だと言って、やっと御免を蒙(こうむ)ったが、はじめて落着いて、酒量の少い人物の、一銚子を、静(しずか)に、やがて傾けた頃、屏風の陰から、うかがいうかがい、今度は妙に、おっかなびっくりといった形で入って来て、あらためてまた給仕についたのであった。

話は前後したが、涙の半紙はここにあった。客は何となく折を見て聞いたのである。

「いましがたちょっと買ものをして来たんだが、」

と言継いで、

「彼家(あそこ)に、嫁さんか、娘さんか、きれいな女が居るだろう。」

「北国一だ。あははは。」

と、大声でいきなり笑った。

「まあまあ、北国一としておいて、何だい、娘かい、嫁さんかい。」

また大声で、

「押惚(おっぽ)れたか。旦那さん。」

「驚かしなさんな。」

「吃驚(びっくり)しただろ、あの、別嬪(べっぴん)に。……それだよ、それが小春(こはる)さんだ。この土地の芸妓(げいしゃ)でね、それだで、雑貨

店の若旦那を、治兵衛坊主と言うだてば。」

「成程、紙屋――あの雑貨店の亭主だな。」

「若い人だ、活(い)きるわ、死ぬるわという評判ものだよ。」

「それで治兵衛……は分ったが、坊主とはどうした訳かね。」

「何、旦那さん、癇癪持(かんしゃくもち)の、嫉妬(やきもち)やきで、ほうずもねえ逆気性(のぼせしょう)でね、おまけに、しつこい、いんしん不通だ。」

「何？……」

「隠元豆、田螺(たにし)さあね。」

「分らない。」

「あれ、ははは、いんきん、たむしだてば。」

「乱暴だなあ。」

「この山代の湯ぐらいでは埒（らち）あかねえさ。脚気（かっけ）山中（やまなか）、かさ粟津（あわづ）の湯へ、七日湯治をしねえ事には半月十日寝られねえで、身体（からだ）中搔毟（かきむし）って、目が引釣（ひッつ）り上る若旦那でね。おまけに、それが小春さんに、金子（かね）も、店も田地までも打込（ぶちこ）んでね。一時（いっとき）は、三月ばかりも、家へ入れて、かみさんにしておいた事もあったがね。」

――初女房（ういにょうぼう）、花嫁ぶりの商いはこれで分った――

「ちゃんと金子を突いたでねえから、抱えぬしの方で承知しねえだよ。摺（す）った揉（も）んだの挙句が、小春さんはまた棲（つま）を取っているだがね、一度女房にした女が、客

商売で出るもんだで、夜がふけてでも見なさいよ、いらいらして、逆気上って、痛痒い処を引掻いたくらいでは埒あかねえで、田にしも隠元豆も地だんだを蹈んで喰嚙るだよ。血は上ずっても、性は陰気で、ちり蓮華の長い顔が蒼しょびれて、しゃくれてさ、それで負けじ魂で、張立てる治兵衛だから、人にものさ言う時は、頭も唇も横町へつん曲るだ。のぼせて、頭ばっかり赫々と、するもんだで、小春さんのいい人で、色男がるくせに、頭髪さ、すべりと一分刈にしている処で、治兵衛坊主、坊主治兵衛だ、なあ、旦那。」

かくと聞けば、トラホーム、目の爛いと思ったは恥

かしい。袂（たもと）に包んだ半紙の雫（しずく）は、まさに山茶花（さざんか）の露である。

「旦那さん、何を考えていなさるだね。」

三

「そうか——先刻（さっき）、買ものに寄った時、その芸妓（げいしゃ）は泣いていたよ。」

「あれ、小春さんが坊主の店に居ただかね。すいても嫌うても、気立（きだて）の優しいお妓（こ）だから、内証（ないしょ）で逢いに行っただろさ。——ほんに、もうお十夜だ——気むずかし

い治兵衛の媼(ばば)も、やかましい芸妓屋の親方たちも、ここ一日二日(いちんちふつか)は講中(こうじゅう)で出入りがやがやしておるで、その隙(ひま)に密(そっ)と逢いに行ったでしょ。」

「お安くないのだな。」

「何、いとしゅうて泣いてるだか、しつこくて泣かされるだか、知れたものではないのだよ。」

「同じ事を……いとしい方にしておくがいい。」

と客は、しめやかに言った。

「厭(いや)な事だ。」

「大層嫌うな。……その執拗(しつこ)い、嫉妬深(しっとぶか)いのに、口説(くど)かれたらお前はどうする。」

「横びんた撲りこくるだ。」
「これは驚いた。」
「北国一だ。山代の巴板額だよ。四斗八升の米俵、両手で二俵提げるだよ。」
「偉い！……その勢で、小春の味方をしておやり。」
「ああ、すべいよ、旦那さんが言わっしゃるなら。……
……」
「わざと……いささかだけれど御祝儀だ。」
肩を振って、拗ねたように、
「要らねえよ。――私こんなもの。……旦那さん。――
――旅行さきで無駄な銭を遣わねえがいいだ。そして……

…」

と顔を向け直すと、ちょっと上まぶたで客を視(み)て、

「旦那さん、いつ帰るかね。」

「いや、深切(しんせつ)は難有(ありがた)いが、いま来たばかりのものに、いつ出程(たつ)かは少し酷(ひど)かろう。」

「それでも、先刻(さっき)来た時に、一晩泊(どまり)だと言ったでねえかね。」

「まったくだ、明日は山中(やまなか)へ行くつもりだ。忙しい観光団さ。」

「緩(ゆっく)り居なされば可(い)いに——では、またじきに来なさいよ。」

と、真顔で言った。
客はその言（ことば）に感じたように、
「勿論来ようが、その時、姐さんは居なかろう。」
「あれ、何でえ？……」
「お嫁に行くから。」
したたか頭（かぶり）を掉（ふ）って、
「ううむ、行かねえ。」
「治兵衛坊主が、たって欲しいと言うそうだ。」
「馬鹿を言うもんでねえ。——治兵衛だろうが、忠兵衛だろうが、……一生嫁に行かねえで待ってるだよ。」
「じゃあ、いっそ、どこへも行かないで、いつまでも

ここに居ようか。私をお婿（むこ）さんにしてくれれば。……」

「するともさ。」

「私は働きがないのだから、婿も養子だ。お前さん養ってくれるかい。」

「ああ、養うよ。朝から晩まですきな時に湯に入れて、御飯（おまんま）を食べさして、遊ばしておけばそれでよかろうがね。」

「勿体（もったい）ないくらい、結構だな。」

「そのくらいなら……私が働く給金でして進ぜるだ。」

「ほんとかい。」

「それだがね、旦那さん。」
「御覧、それ、すぐに変替（へんがえ）だ。」
「ううむ、ほんとうだ、が、こんな上段の室（ま）では遣切（やりき）れねえだ。——裏座敷の四畳半か六畳で、ふしょうして下さんせ、お膳の御馳走も、こんなにはつかねえが、私が内証（ないしょ）でどうともするだよ。」
客は赤黒く、口の尖（とが）った、にきびで肥（ふと）った顔を見つつ、
「姐さん、名は何と言う。」
と笑って聞いた。
「ふ、ふ、ふ。」と首を振っている。

「何と言うよ。」

「措（お）きなさい、そんな事。」

と耳朶（みみたぼ）まで真赤（まっか）にした。

「よ、ほんとに何と言うよ。」

「お光だ。」

と、飯櫃（めしびつ）に太い両手を突張（つっぱ）って、ぴょいと尻を持立（もった）てる。遁構（にげがまえ）でいるのである。

「お光さんか、年紀（とし）は。」

「知らない。」

「まあ、幾歳（いくつ）だい。」

「顔だ。」

「何、」

「私の顔だよ、猿だてば。」

「すると、幾歳だっけな。」

「桃栗三年、三歳（みッつ）だよ、ははは。」

と笑いながら駈出（かけだ）した。この顔が——くどいようだが——楊貴妃の上へ押並んで振向いて、

「二十（はたち）だ……鼬（いたち）だ……べべべべ、べい——」

四

ここに、第九師団衛戍（えいじゅ）病院の白い分院がある。——

薬師寺、万松園（まんしょうえん）、春日山（かすがやま）などと共に、療養院は、山代の名勝に入っている。絵はがきがある。御覧なさい。
病院にして名勝の絵になったのは、全国ここばかりであろうも知れない。

　この日当りで暖かそうなが、青白い建ものの、門の前は、枯葉半ば、色づいた桜の木が七八株、一列に植えたのを境に、もう温泉（いでゆ）の町も場末のはずれで、道が一坂小だかくなって、三方は見通しの原で、東に一帯の薬師山の下が、幅の広い畷（なわて）になる。桂谷（かつらだに）と言うのへ通ずる街道である。病院の背後を劃（しき）って、蜿々（うねうね）と続いた松まじりの雑木山は、畠を隔てたばかり目の前（さき）に

近いから、遠い山も、嶮しい嶺も遮られる。ために景色が穏かで、空も優しい。真綿のように処々白い雲を刷いたおっとりとした青空で、やや斜な陽が、どことなく立渡る初冬の霧に包まれて、ほんのりと輝いて、光は弱いが、まともに照らされては、のぼせるほどの暖かさ。が、陰の袖は、そぞろに冷い。

その近山の裾は半ば陰ったが、病院とは向う合せに、この畷から少し低く、下りめになって、陽の一杯に当る枯草の路が、ちょろちょろとついて、その径と、畷の交叉点がゆるく三角になって、十坪ばかりの畑が一枚。見霽の野山の中に一つある。一方が広々とした

刈田（かりた）との境に、垣根もあったらしいが、竹も塀もこわれごわれで、朽ちた杭（くい）ばかり一本、せめて案山子（かかし）にでも化けたそうに灰色に残って、尾花が、ぼうと消えそうに、しかし陽を満々と吸って、あ、あ、長閑（のどか）な欠伸（あくび）でも出そうに、その杭に凭（もた）れている。藁（わら）が散り、木の葉が乱れた畑には、ここらあたり盛（さかん）に植える、杓子菜（しゃくしな）と云って、株の白い処が似ているから、蓮華菜（れんげな）とも言うのを、もう散々に引棄てたあとへ、陽気が暖（あたたか）だから、乾いた土の、ほかほかともりあがった処へ、細く青く芽をふいた。

畑の裾は、町裏の、ごみごみした町家（まちや）、農家が入乱

れて、樹立がくれに、小流を包んで、ずっと遠く続いたのは、山中道で、そこは雲の加減で、陽が薄赤く颯と射す。

色も空も一淀みする、この日溜りの三角畑の上ばかり、雲の瀬に紅の葉が柵むように、夥多しく赤蜻蛉が群れていた。——出会ったり、別れたり、上下にスッと飛んだり。あの、紅また薄紅、うつくしい小さな天女の、水晶の翼は、きらきらと輝くのだけれど、もう冬で……遊びも闌に、恍惚したらしく、夢を徜徉うように、ふわふわと浮きつ、沈みつ、漾いつ。で、時々目がさめたように、パッと羽を光らせるが、またぼう

となって、暖かに霞んで飛交う。

日南（ひなた）の虹（にじ）の姫たちである。

風情に見惚（みと）れて、近江屋の客はただ一人、三角畑の角に立って、山を背に繞（めぐ）らしつつ彳（たたず）んでいるのであった。

四辺（あたり）の長閑（のど）かさ。しかし静（しずか）な事は――昼飯を済（すま）せてから――買ものに出た時とは反対の方に――そぞろ歩行（あるき）でぶらりと出て、温泉（いでゆ）の廓（くるわ）を一巡り、店さきのきらびやかな九谷焼、奥深く彩った漆器店。両側の商店が、やがて片側になって、媚（なまめ）かしい、紅（べに）がら格子（ごうし）を五六軒見たあとは、細流（せせらぎ）が流れて、薬師山を一方に、

呉羽神社(くれはじんじゃ)の大鳥居前を過ぎたあたりから、往来(ゆきか)う人も、来る人も、なくなって、古ぼけた酒店(さかみせ)の杉葉の下(もと)に、茶と黒と、鞠(まり)の伸びたほどの小犬が、上になり下になり、おっとりと耳を噛(か)んだり、ちょいと鼻づらを引(ひっ)かき合ったり。……これを見ると、羨(うらや)ましいか、桶(おけ)の蔭から、むくと起きて、脚をひろげて、もう一匹よちよちと、同じような小狗(こいぬ)は出て来ても、村の閑寂間(しじま)か、棒切(ぼうきれ)持った小児(こども)も居ない。

で、ここへ来た時……前途(むこう)山の下から、頬被(ほおかぶ)りした脊の高い草鞋(わらじ)ばきの親仁(おやじ)が、柄の長い鎌を片手に、水だか酒だか、縄からげの一升罎(いっしょうびん)をぶら下げたのが、て

くりてくりと、畷を伝い、松茸の香を芬（ぷん）とさせて、蛇の莫蓙（ござ）と称（とな）うる、裏白の葉を堆（うずたか）く装（も）った大籠（おおかご）を背負（しょ）ったのを、一ツゆすって通過ぎた。うしろ形（つき）も、罎と鎌で調子を取って、大手を振った、おのずから意気の揚々とした処は、山の幸を得た誇（ほこり）を示す。……籠に、あの、ばさばさ群った葉の中に、鯰（なまず）のような、小鮒（こぶな）のような、頭の大（おおき）な茸（たけ）がびちびち跳ねていそうなのが、温泉（いでゆ）の町の方へずッと入った。しばらく、人に逢ったのはそればかりであった。

客は、陽（ひなた）の赤蜻蛉に見惚（みと）れた瞳を、ふと、畑際（はたぎわ）の尾花に映すと、蔭の片袖が悚然（ぞっ）とした。一度、しかとし

めて拱いた腕を解いて、やや震える手さきを、小鬢に密と触れると、喟然として面を暗うしたのであった。日南に霜が散ったように、鬢にちらちらと白毛が見える。その時、赤蜻蛉の色の真紅なのが忘れたようにスッと下りて、尾花の下に、杭の尖に留った。……一度伏せた羽を、衝と張った、きらりと輝かした時、あの緑の目を、ちょっと此方へ振動かした。

小狗の戯にも可懐んだ。幼心に返ったのである。

教授は、ほとびるがごとき笑顔になった。が、きりりと唇をしめると、真黒な厚い大な外套の、背腰を屈びりに屈めて、及腰に右の片手を伸しつつ、密と狙っ

て寄った。が、どうしてどうして、小児（こども）のように軽く行かない。ぎくり、しゃくり、いまが大切、……よちりと飛附く。……南無三宝（なむさんぽう）、赤蜻蛉は颯（さっ）と外（そ）れた。

はっと思った時である。

「おほほほほ。はははは。」

花々しく調子高に、若い女の笑声が響いた。

向うに狗児（いぬころ）の形（かげ）も、早や見えぬ。四辺（あたり）に誰も居ないのを、一息の下（もと）に見渡して、我を笑うと心着いた時、咄嗟（とっさ）に渋面を造って、身を捻（ね）じるように振向くと……

この三角畑の裾の樹立（こだち）から、広野（ひろの）の中に、もう一条（ひとすじ）、畷（なわて）と傾斜面の広き刈田を隔てて、突当りの山裾へ

畦道(あぜみち)があるのが屏風のごとく連(つらな)った、長く、丈(せい)の高い掛稲(かけいね)のずらりと続いたのに蔽(おお)われて、半ばで消えるので気がつかなかった。掛稲のきれ目を見ると、遠山の雪の頂が青空にほとばしって、白い兎が月に駈(か)けるようである。下も水のごとく、尾花の波が白く敷く。刈残した粟(あわ)の穂の黄色なのと段々になって、立蔽う青い霧に浮いていた。

と見向いた時、畦の嫁菜を褄(つま)にして、その掛稲の此方(こなた)に、目も遥(はるか)な野原刈田を背にして間(あわい)が離れて確(しか)とは見えぬが、薄藍(うすあい)の浅葱(あさぎ)の襟して、髪の艶(つや)やかな、色の白い女が居て、いま見合せた顔を、急に背けるや否

や、たたきつけるように片袖を口に当てたが、声は高々と、澄切った空を、野に響いた。

「おほほほほ、おほほほ、おほほほほ。」

おや、顔に何かついている？……すべりを扱（しご）いて、思わず撫（な）でると、これがまた化かされものが狐に対する眉毛に唾（つば）と見えたろう。

金切声で、「ほほほほほほ。」

十歩ばかり先に立って、一人男の連（つれ）が居た。縞（しま）がらは分らないが、くすんだ装（なり）で、青磁色の中折帽（なかおれぼう）を前のめりにした小造（こづくり）な、痩（や）せた、形の粘々（ねばねば）とした男であった。これが、その晴やかな大笑（おおわらい）の笑声に驚いたよう

に立留って、廂睨みに、女を見ている。
　何を笑う、教授はまた……これはこの陽気に外套を着たのが可笑いのであろうと思った……言うまでもない。――途中でな、誰を見ても、若いものにも、老人にも、外套を着たものは一人もなかった。湯の廓は皆柳の中を広袖で出歩行く。勢なのは浴衣一枚、裸体も見えた。もっとも宿を出る時、外套はと気がさしたが、借りて着込んだ浴衣の糊が硬々と突張って、広袖の膚につかないのが、悪く風を通して、ぞくぞくするために、すっぽりと着込んでいるのである。成程、ただ一人、帽子も外套も真黒に、畑に、つッくりと立っ

た処は、影法師に狐が憑（つ）いたようで、褌（ふんどし）をぶら下げて裸で陸（おか）に立ったより、わかい女には可笑（おか）しかろう……

いや、蜻蛉釣（とんぼつり）だ。

ああ、それだ。

小鬢（こびん）に霜のわれらがと、たちまち心着いて、思わず、禁ぜざる苦笑を洩（もら）すと、その顔がまた合った。

「ぷッ、」と噴出すように更に笑った女が、堪（たま）らぬといった体（てい）に、裾をぱッぱッと、もとの方（かた）へ、五歩六歩（いつあしむあし）駈戻（かけもど）って、捻（ね）じたように胸を折って、

「おほほほほ。」

胸を反(そら)して、仰向(あおむ)けに、

「あははは。」

たちまちくるりとうしろ向きに、何か、もみじの散りかかる小紋の羽織の背筋を見せて、向うむきに、雪の遠山へ、やたらに叩頭(おじぎ)をする姿で、うつむいて、

「おほほ、あはは、あははははは。あははははは。」

やがて、朱鷺色(ときいろ)の手巾(ハンケチ)で口を蔽うて、肩で呼吸(いき)して、向直って、ツンと澄(すま)して横顔で歩行(ある)こうとした。が、何と、自(おのず)から目がこっちに向くではないか。二つ三つ手巾に、すぶりをくれて、たたきつけて、また笑った。

「おほほほほ、あははは、あはははははは。」

八口(やつくち)を洩(も)る紅(くれない)に、腕の白さのちらめくのを、振って揉(も)んで身悶(みもだえ)する。

きょろんと立った連(つれ)の男が、一歩(ひとあし)返して、圧(おさ)えるごとくに、握拳(にぎりこぶし)をぬっと突出すと、今度はその顔を屈(かが)み腰に仰向いて見て、それにも、したたかに笑ったが、またもや目を教授に向けた。

教授も堪(こら)えず、ひとり寂しくニヤニヤとしながら、半ば茫然として立っていたが、余りの事に、そこで、うっかり、べかッこを遣ったと思え。

「きゃっ、ひいッ。」と逆に半身を折って、前へ折曲げ

て、脾腹（ひばら）を腕で圧えたが追着（おッつ）かない。身を悶え、肩を揉み揉みへとへとになったらしい。……畦の端の草もみじに、だらしなく膝をついた。半襟の藍に嫁菜が咲いて、

「おほほほほほ、あははは、おほほほほ。」

　そこを両脇、乳も、胸も、もぞもぞと尾花が擽（くすぐ）る！　はだかる襟の白さを合すと、合す隙に、しどけない膝小僧の雪を敷く。島田髷（しまだ）も、切れ、はらはらとなって、

「堪忍してよう、おほほほほ、あはははは。」

　と、手をふるはずみに、鳴子縄（なるこなわ）に、くいつくばかり、ひしと縋（すが）ると、刈田の鳴子が、山に響いてからからか

ら、からからからから。

「あはははは。おほほほほ。」

勃然（むっ）とした体（てい）で、島田の上で、握拳の両手を、一度打擲（ちょうちゃく）をするごとくふって見せて、むっとして男が行くので、はあはあ膝を摺（ず）らし、腰を引いて、背には波を打たしながら、身を蜿（うね）らせて、やっと立って、女は褄を引合せざまに振向くと、ちょっと小腰を屈めながら、教授に会釈をするが疾（はや）いか。

「きゃあ――」と笑って、衝（つ）と駈（か）けざまに、男のあとを掛稲の背後（うしろ）へ隠れた。

その掛稲は、一杯の陽の光と、溢（あふ）れるばかり雀を吸っ

て、むくむくとして、音のするほど膨れ上って、なお堪（こら）えず、おほほほほ、笑声を吸込んで、遣切（やりき）れなくなって、はち切れた。稲穂がゆさゆさと一斉に揺れたと思うと、女の顔がぼっと出て、髪を黒く、唇を紅（あか）く、

「おほほほほほほほ、あはははははは。」

「白痴奴（だらめ）、汝（おどれ）！」

ねつい、怒（いか）った声が響くと同時に、ハッとして、旧（もと）の路へ遁（に）げ出した女の背に、つかみかかる男の手が、伸びつつ届くを、躱（かわ）そうとしたのが、真横にばったり。伸（の）しかかると、二ツ三ツ、ものをも言わずに、頬とも言わず、肩とも言わず、男の拳が、尾花の穂がへし

折れるように見えて打擲した。

顔も、髪も、土(どろ)まみれに、真白(まっしろ)な手を袖口から、ひしと合せて、おがんで縋って、起きようとする、腕を払って、男が足を上げて一つ蹴た。

瞬くばかりの間である。

「何をする、何をする。」

たかが山家(やまが)の恋である。男女の痴話の傍杖(そばづえ)より、今は、高き天(そら)、広き世を持つ、学士榊三吉も、むかし、一高で骨を鍛えた向陵の健児の意気は衰えず、

「何をする、何をするんだ。」

草の径(みち)ももどかしい。畦(あぜ)ともいわず、刈田と言わず、

真直(まっすぐ)に突切(つっき)って、颯(さっ)と寄った。

この勢いに、男は桂谷の山手の方へ、掛稲を縫って、鳥とともに飛んで遁(に)げた。

「おお。」

「あ、あれ、先刻(さっき)の旦那さん。」

遁げた男は治兵衛坊主で――お光に聞いた――小春であった。

「外套を被(かぶ)って、帽子をめして、……見違えて、おほほほほ、失礼な、どうしましょう。」

と小春は襟も帯も乱れた胸を、かよわく手でおさえて、片手で外套の袖に縋りながら、蒼白(まっさお)な顔をして、

涙の目でなお笑った。

「おほほほほ、堪忍、御免なすって、あははははは。」

妙齢(としごろ)だ。この箸がころんでも笑うものを、と憮然(ぶぜん)としつつ、駒下駄が飛んで、はだしの清い、肩も膝も紅(くれない)の乱れた婦(おんな)の、半ば起きた肩を抱いた。

「御免なすって、旦那さん、赤蜻蛉をつかまえようと遊ばした、貴方(あなた)の、貴方の形が、余り……余り……おほほほほ。」

「いや、我ながら、思えば可笑(おか)しい。笑うのは当り前だ。が、気の毒だ。連(つれ)の男は何という乱暴だ。」

「ええ、家(うち)ではかえって人目に立つッて、あの、おほ

ほ、心中（しんじゅう）の相談をしに来た処だものですから、あはははは。」

ひたと胸に、顔をうずめて、泣きながら、

「おほほほほほほ。」

五

「旦那さん、そんなら、あの、私、……死なずと大事ございませんか……」

「――言うだけの事はないよ、――まるツきり、お前さんが慾（よく）ばかりでだましたのでみた処で……こっちは

芸妓だ。罪も報もあるものか。それに聞けば、今までに出来るだけは、人情も義理も、苦労をし抜いて尽しているんだ。……勝手な極道とか、遊蕩とかで行留りになった男の、名は体のいい心中だが、死んで行く道連れにされて堪るものではない。――その上、一人身ではないそうだ。――ここへ来る途中で俄盲目の爺さんに逢って、おなじような目の悪い父親があると言って泣いたじゃないか。」――

掛稲、嫁菜の、畦に倒れて、この五尺の松に縋って立った、山代の小春を、近江屋へ連戻った事は、すぐ

に頷(うなず)かれよう。芸妓(げいしゃ)である。そのまま伴って来るのに、何の仔細(しさい)もなかったこともまた断るに及ぶまい。なお聞けば、心中は、単に相談ばかりではない。こうした場所と、身の上では、夜中よりも人目に立たない、静(しずか)な日南(ひなた)の隙を計って、岐路(えだみち)をあれからすぐ、桂谷へ行くと、浄行寺(じょうぎょうじ)と云う門徒宗が男の寺。……そこで宵の間(ま)に死ぬつもりで、対手(あいて)の袂(たもと)には、商(あきない)ものの、(何とか入らず)と、懐中には小刀(ナイフ)さえ用意していたと言うのである。

上前(うわまえ)の摺下(ずりさが)る……腰帯の弛(ゆる)んだのを、気にしいしい、片手でほつれ毛を掻きながら、少しあとへ退(さが)ってつい

て来る小春の姿は、道行から遁げたとよりは、山奥の人身御供から助出されたもののようであった。

左山中道、右桂谷道、と道程標の立った追分へ来ると、——その山中道の方から、脊のひょろひょろとした、頤の尖った、痩せこけた爺さんの、菅の一もんじ笠を真直に首に据えて、腰に風呂敷包をぐらつかせたのが、すあしに破脚絆、草鞋穿で、とぼとぼと竹の杖に曳かれて来たのがあった。

この竹の杖を宙に取って、さきを握って、前へも立たず横添に導きつつ、くたびれ脚を引摺ったのは、目も耳もかくれるような大な鳥打帽の古いのをかぶっ

た、八つぐらいの男の児（こ）で。これも風呂敷包を中結（なかゆわ）えして西行背負（さいぎょうじょい）に背負っていたが、道中（みちなか）へ、弱々と出て来たので、横に引張合（ひっぱりあ）った杖が、一方通せん坊になって、道程標（みちしるべ）の辻の処で、教授は足を留めて前へ通した。が、細流（せせらぎ）は、これから流れ、鳥居は、これから見え、町もこれから賑（にぎや）かだけれど、俄めくらと見えて、突立（つった）った足を、こぶらに力を入れて、あげたり、すぼめたりするように、片手を差出して、手探りで、巾着（きんちゃく）ほどな小児（こども）に杖を曳かれて辿（たど）る状（さま）。いま生命（いのち）びろいをした女でないと、あの手を曳いて、と小春に言ってみたいほど、山家の冬は、この影よりして、町も、軒も、

水も、鳥居も暗く黄昏（たそが）れた。

駒下駄のちょこちょこあるきに、石段下、その呉羽の神の鳥居の蔭から、桃割（ももわれ）ぬれた結立（ゆいたて）で、緋鹿子（ひがのこ）の角絞（つのしぼ）り。簪（かんざし）をまだささず、黒繻子（くろじゅす）の襟の白粉垢（おしろいあか）の冷たそうな、かすりの不断着をあわれに着て、……前垂（まえだれ）と帯の間へ、古風に手拭（てぬぐい）を細（こま）かく挟んだ雛妓（おしゃく）が、殊勝にも、お参詣（まいり）の戻（もどり）らしい……急足（いそぎあし）に、つつッと出た。

が、盲目（めくら）の爺（とっ）さんとすれ違って前へ出たと思うと、空から抱留められたように、ひたりと立留って振向いた。

「や、姉ちゃん。」——と小児（こども）が飛着く。

見る見るうちに、雛妓の、水晶のような睜（みは）った目は、

一杯の涙である。

小春は密（そっ）と寄添うた。

「姉ちゃん、お父ちゃんが、お父ちゃんが、目が見えなくなるから、……ちょっと姉ちゃんを見てえってなあ。……」

西行背負の風呂敷づつみを、肩の方から、いじけたように見せながら、

「姉ちゃん、大すきな豆の餅（あんも）を持って来た。」

ものも言い得ず、姉さんは、弟のその頭（つむり）を撫（な）でると、仰いで笠の裡（うち）を熟（じっ）と視（み）た。その笠を被（かぶ）って立てる状（さま）は、かかる苦界にある娘に、あわれな、みじめな、見すぼ

らしい俄盲目には見えないで、しなびた地蔵菩薩のようであった。

親仁は抱しめもしたそうに、手探りに出した手を、火傷したかと慌てて引いて、その手を片手おがみに、あたりを拝んで、誰ともなしに叩頭をして、

「御免下され、御免下され。」

と言った。

「正念寺様におまいりをして、それから木賃へ行くそうです。いま参りましたのは、あの妓がちょっと……やかたへ連れて行きましたの。」

突当（つきあたり）らしいが、横町を、その三人が曲りしなに、小春が行きすがりに、雛妓（おしゃく）と囁（ささや）いて「のちにえ。」と言って別れに、さて教授にそう言った。

――来た途中の俄盲目は、これである――

やがて、近江屋の座敷では、小春を客分に扱って、膳を並べて、教授が懇（ねんごろ）に説いたのであった。

「……ほんとに私、死なないでも大事ございませんわね。」

「死んで堪（たま）るものか、死ぬ方が間違ってるんだ。」

「でも、旦那さん、……義理も、人情も知らない女だ、

薄情だと、言われようかと、それぱかりが苦になりました。もう人が何と言いましょうと、旦那さんのお言（ことば）ばかりで、どんなに、あの人から責められましても私はきっぱりと、心中なんか厭（いや）だと言います。お庇（かげ）さまで助りました。またこれで親兄弟のいとしい顔も見られます。もう、この一年ばかりこのかたと言いますもの、朝に晩に泣いてばかり、生きた瀬はなかったのです。——その苦（くるし）みも抜けました。貴方は神様です。仏様です。」

「いや、これが神様や仏様だと、赤蜻蛉の形をしているのだ。」

「おほほ。」

「ああ、ほんとに笑ったな——もう可(よ)し、決して死ぬんじゃないよ。」

「たとい間違っておりましても、貴方のお言(ことば)ばかりで活(い)きます。女の道に欠けたと言われ、薄情だ、売女(ばいた)だと言う人がありましても、……口に出しては言いませんけれど、心では、貴方のお言葉ゆえと、安心をいたします。」

「あえて構わない。この俺が、私と言うものが、死ぬなと言ったから死なないと、構わず言え。——言ったって決して構わん。」

「いいえ、勿体ない、お名ふだもおねだり申して頂きました。人には言いはしませんが、まあ、嬉しい。……嬉しゅうございますわ。——旦那さん。」

「…………」

「あの、それですけれど……安心をしましたせいですか、落胆（がっかり）して、力が抜けて。何ですか、余り身体（からだ）にたわいがなくって、心細くなりました。おそばへ寄せて下さいまし……こんな時でございませんと、思い切って、お顔が見られないのでございますけど、それでも、やっぱり、暗くて見えはしませんわ。」

と、膝に密（そっ）と手を置いて、振仰いだらしい顔がほの

白い。艶濃（つやこ）き髪の薫（かおり）より、眉がほんのりと香（にお）いそうに、近々とありながら、上段の間は、いまほとんど真暗（まっくら）である。

六

実は、さきに小春を連れて、この旅館へ帰った頃に、廊下を歩行（ある）き馴（な）れたこの女が、手を取ったほど早や暗くて、座敷も辛（かろう）じて黒白（あいろ）の分るくらいであった。金屏風（きんびょうぶ）とむきあった、客の脱すてを掛けた衣桁（いこう）の下（もと）に、何をしていたか、つぐんでいて、道陸神（どうろくじん）のような影を、

ふらふらと動かして、ぬいと出たものがあった。あれと言った小春と、ぎょっとした教授に「北国一。」と浴（あび）せ掛けて、またたく間に廊下をすっ飛んで行ったのは、あのお光であったが。

直（すぐ）に小春が、客の意を得て、例の卓上電話で、二人の膳を帳場に通すと、今度註文をうけに出たのは、以前の、歯を染めた寂しい婦（おんな）で、しょんぼりと起居（たちい）をするのが、何だか、産女鳥（うぶめ）のように見えたほど、――時間はさまでにもなかったが、わけてこの座敷は陰気だった。

頼もしいほど、陽気に賑（にぎや）かなのは、廂（ひさし）はずれに欄

干の見える、崖の上の張出しの座敷で、客も大勢らしい、四五人の、芸妓の、いろいろな声に、客のがまじって、唄う、弾く、踊っていた。

船の舳(みよし)の出たように、もう一座敷重(かさな)って、そこにも三味線(さみせん)の音がしたが、時々哄(どっ)と笑う声は、天狗が谺(こだま)を返すように、崖下の庭は暮れるものを、いつまでも電燈がつかない。

小春の藍(あい)の淡い襟、冷い島田が、幾度(いくたび)も、縁を覗(のぞ)いて、ともに燈(ともし)を待ちもした。

この縁の突当りに、上敷(うわしき)を板に敷込んだ、後架(こうか)があって、機械口の水も爽(さわやか)だったのに、その暗紛れに、教

授が入った時は一滴の手水(ちょうず)も出なかったので、小春に言うと、電話までもなく、帳場へ急いで、しばらくして、真鍮(しんちゅう)の水さしを持って来て言うのには、手水は発動機で汲上(くみあ)げている処、発電池に故障があって、電燈もそのために後(おく)れると、帳場で言っているそうで。そこで中縁(なかえん)の土間の大(おおき)な石の手水鉢、ただし落葉が二三枚、不思議に燈籠に火を点(とも)したように見えて、からからに乾いて水はない。そこへ誘って、つき膝で、艶(えん)になまめかしく颯(さっ)と流してくれて、

「あれ、はんけちを田圃道(たんぼみち)で落して来て、……」

「それも死神の風呂敷だったよ。」

「可恐(こわ)いわ、旦那さん。」

その水さしが、さて……いまやっぱり、手水鉢の端(はた)に据(すわ)っているのが幽(かすか)に見える。夕暮の鷺(さぎ)が長い嘴(くちばし)で留ったようで、何となく、水の音も、ひたひたとするようだったが、この時、木菟(みみずく)のようになって、とっぷりと暮れて真暗(まっくら)だった。

「どうした、どうした。……おお、泣いているのか。

——私は……」

「ああれ、旦那さん。」

と、厠(かわや)の板戸を、内から細目に、小春の姿が消えそうに、

「私、つい、つい、うっかりして、あのお恥かしくって泣くんですわ……ここには水がありません。」

「そうか。」

と教授が我が手で、その戸を開けてやりつつ、

「こっちへお出で、かけてやろう。さ。」

「は。」

「可(い)いか、十分に……」

「あれ、どうしましょう、勿体ない、私は罰が当ります。」

懐紙に二階の影が散る。……高い廊下をちらちらと燭台（しょくだい）の火が、その高楼（たかどの）の欄干（てすり）を流れた。

「罰の当ったはこの方だ。――しかし、婦人（おんな）の手に水をかけたのは生れてからはじめてだ。赤ん坊になったから、見ておくれ。お庇（かげ）で白髪が皆消えて、真黒（まっくろ）になったろう。」

まことに髪が黒かった。教授の顔の明るさ。

「この手水鉢は、実盛（さねもり）の首洗（くびあらい）の池も同じだね。」

「ええ、縁起でもない、旦那さん。」

「ま、姦通（まおとこ）め。ううむ、おどれ等。」

「北国一だ。……危（あぶね）えよ。」

殺した声と、呻く声で、どたばた、どしんと音がすると、万歳と、向二階で喝采、ともろ声に喚いたのとほとんど一所に、赤い電燈が、蒟蒻のようにぶるぶると震えて点いた。

七

小春の身を、背に庇って立った教授が、見ると、繻子の黒足袋の鼻緒ずれに破れた奴を、ばたばたと空に撥ねる、治兵衛坊主を真俯向けに、押伏せて、お光が赤蕪のような膝をはだけて、のしかかっているので

ある。

「危い——刃ものを持ってるぞ。」

絨毯(じゅうたん)を縫いながら、治兵衛の手の大小刀(おおナイフ)が、しかし赤黒い電燈に、錆蜈蚣(さびむかで)のように蠢(うごめ)くのを、事ともしないで、

「何が、犬にも牙(きば)がありゃ、牛にも角があるだあね。こんな人間の刃ものなんぞ、どうするかね。この馬鹿野郎。それでも私が来ねえと、大事なお客さんに怪我をさせる処だっけ。飛んでもねえ嫉妬野郎(やきもちやろう)だ。大(でけ)い声を出してお帳場を呼ぼうかね、旦那さん、どうするね。私が一つ横ずっぽう撲(は)りこくってやろうかね。」

「ああ、静（しずか）に——乱暴をしちゃ不可（いけな）い。」
教授は敷居へ、内へ向けて引きながら、縁側の籐椅子（とういす）に掛けた。
「君は、誰を斬るつもりかね。」
「うむ、汝（おどれ）から先に……当前（あたりまえ）じゃい。うむ、放せ、口惜（くやし）いわい。」
「迷惑をするじゃあないか。旅の客が湯治場の芸妓（げいしゃ）を呼んで遊んだが、それがどうした。」
「汝（おどれ）、俺の店まで、呼出しに、汝、逢曳（あいびき）にうせおって、姦通（まおとこ）め。」
「血迷うな、誤解はどうでも構わないが、君は卑劣だ

よ。……使った金子(かね)に世の中が行詰(ゆきづま)って、自分で死ぬのは、間違いにしろ、勝手だが、死ぬのに一人死ねないで、未練にも相手の女を道づれにしようとして附絡(つけまと)うのは卑劣じゃあないか。――投出す生命(いのち)に女の連(つれ)を拵(こさ)えようとするしみったれさはどうだ。出した祝儀に、利息を取るよりけちな男だ。君、可愛い女と一所に居る時は、蚤(のみ)が一つ余計に女にたかっても、ああ、おれの身をかわりに吸え、可哀想だと思うが情だ。涼しい時に虫が鳴いても、かぜを引くなよ、寝冷(ねびえ)をするなと念じてやるのが男じゃないか。――自分で死ぬほど、要らぬ生命(いのち)を持っているなら、おなじ苦労をした女の、

寿命のさきへ、鼻毛をよって、継足(つぎたし)をしてやるが可(い)い。このうつくしい、優しい女を殺そうとは何事だ。これ聞け。俺も、こんな口を利いたって、ちっとも偉い男ではない。お互に人間の中の虫だ。――虫だが、書物ばかり食っている、しみのような虫だから、失礼ながら君よりは、清潔(きれい)だよ。それさえ……それでさえ、聞けよ。――心中の相談をしている時に、おやじが蜻蛉(とんぼ)釣る形の可笑(おかし)さに、道端へ笑い倒れる妙齢(としごろ)の気の若さ……今もだ……うっかり手水(ちょうず)に行って、手を洗う水がないと言って、戸を開け得ない、きれいな女と感じた時は、娘のような可愛さに、唇の触ったばかりでも。」

「ううむ、ううむ。」と呻（うな）った。

「申訳のなさに五体が震える。何だ、その女に対して、隠元、田螺（たにし）の分際で、薄汚い。いろも、亭主も、心中も、殺すも、活（いか）すもあるものか。——静（しずか）にここを引揚げて、早く粟津の湯へ入れ——自分にも二つはあるまい、生命（いのち）の養生をするが可（い）い。」

「餓鬼めが、畜生！」

「おっと、どっこい。」

「うむ、放せ。」

「姐（ねえ）さん、放しておやり。」

「危（あぶね）え、旦那さん。」

「いや、私はまだその人に、殺されも、斬られもしそうな気はしない。お放し。」

「おお、もっともな、私がこの手を押えているで、どうする事も出来はしねえだ。」

「さあ、胸を出せ、袖を開けろ。私は指一つ圧(おさ)えていない。婦人(おんな)が起(た)ってそこへ縋(すが)れば、話は別だ。桂清水(かつらしみず)とか言うので顔を洗って私も出直す――それ、それ、見たが可(い)い。婦人(おんな)は、どうだ、椅子の陰へ小さく隠れて、身を震わしているじゃあないか。――帰りたまえ。」

また電燈が、滅びるように、呼吸(いき)をひいて、すっと

消えた。

「二人とも覚えてけつかれ。」

「この野郎、どこから入った。ああ、——そうか。三畳の窓を潜(くぐ)って、小(ちっ)こい、庭境(にわざかい)の隣家(となり)の塀から入ったな。争われぬもんだってば。……入った処から出て行くだからな。壁を摺(ず)って、窓を這(は)って、あれ板塀にひッついた、とかげ野郎。」

小春は花のいきするように、ただ教授の背後(うしろ)から、帯に縋って、さめざめと泣いていた。

八

ここの湯の廓（くるわ）は柳がいい。分けて今宵は月夜である。五株、六株、七株、すらすらと立ち長く靡（なび）いて、しっとりと、見附（みつけ）を繞（めぐ）って向合う湯宿が、皆この葉越（はごし）に窺（うかが）われる。どれも赤い柱、白い壁が、十五間（けん）間口、十間間口、八間間口、大きな（舎）という字をさながらに、湯煙（ゆけむり）の薄い胡粉（ごふん）でぼかして、月影に浮いていて、甍（いらか）の露も紫に凝るばかり、中空に冴（さ）えた月ながら、気の暖かさに朧（おぼろ）である。そして裏に立つ山に湧（わ）き、処々に透く細い町に霧が流れて、電燈の蒼（あお）い砂子（すなご）を鏤（ちりば）めた景色は、広重（ひろしげ）がピラミッドの夢を描いたようである。

柳のもとには、二つ三つ用心水(みず)の、石で亀甲(きっこう)に囲った水溜(みずたまり)の池がある。が、涸(か)れて、寂しく、雲も星も宿らないで、一面に散込んだ柳の葉に、山谷の落葉を誘って、塚を築いたように見える。とすれば月が覗(のぞ)く。……覗くと、光がちらちらとさすので、水があるのを知って、影が光る、柳も化粧をするのである。分けて今年は暖(あたたか)さに枝垂(しだ)れた黒髪はなお濃(こまや)かで、中にも真中(まんなか)に、月光を浴びて漆のように高く立った火の見階子(ばしご)に、袖を掛けた柳の一本(ひともと)は瑠璃天井(るりてんじょう)の階子段に、遊女の凭(もた)れた風情がある。

このあたりを、ちらほらと、そぞろ歩行(あるき)の人通り。

見附正面の総湯の門には、浅葱（あさぎ）に、紺に、茶の旗が、納手拭（おさめてぬぐい）のように立って、湯の中は祭礼（まつり）かと思う人声の、女まじりの賑かさ。――だぶだぶと湯の動く音。軒前（のきさき）には、駄菓子店（みせ）、甘酒の店、飴（あめ）の湯、水菓子の夜店が並んで、客も集れば、湯女（ゆな）も掛ける。髯（ひげ）が啜（すす）る甘酒に、歌の心は見えないが、白い手にむく柿の皮は、染めたささ蟹（がに）の糸である。

みな立つ湯気につつまれて、布子も浴衣の色に見えた。

人の出入り一盛り。仕出しの提灯（ちょうちん）二つ三つ。紅（あか）いは、おでん、白いは、蕎麦（そば）。横路地を衝（つい）と出て、やや

門(かど)とざす湯宿の軒を伝う頃、一しきり静(しずか)になった。が、十夜をあての夜興行の小芝居もどりにまた冴える。女房、娘、若衆(わかいしゅ)たち、とある横町の土塀の小路(こみち)から、ぞろぞろと湧いて出た。が、陸軍病院の慰安のための見物がえりの、四五十人の一行が、白い装(よそおい)でよぎったが、霜の使者(つかい)が通るようで、宵過ぎのうそ寒さの再び春に返ったのも、更に寂然(せきぜん)としたのであった。

月夜鴉(つきよがらす)が低く飛んで、水を潜(くぐ)るように、柳から柳へ流れた。

「うざくらし、厭(いや)な——お兄(あん)さん……」

芝居がえりの過ぎたあと、土塀際の引込んだ軒下に、

潜戸(くぐりど)を細目に背にした門口(かどぐち)に、月に青い袖、帯黒く、客を呼ぶのか、招くのか、人待顔に袖を合せて、肩つき寒く佇(たたず)んだ、影のような婦(おんな)がある。と、裏の小路からふらりと出て、横合からむずと寄って肩を抱いた。その押つぶしたような帽子の中の男の顔を、熟(じっ)とすかして——そう言った。

「お門(かど)が違うやろね、早う小春さんのとこへ行く事や。」と、格子の方へくるりと背く。

紙屋は黙って、ふいと離れて、すぐ軒ならびの隣家(となり)の柱へ、腕で目をおさえるように、帽子ぐるみ附着(くッつ)いた。

何の真似やら、おなじような、あたまから羽織を引(ひっ)かぶった若い衆(しゅ)が、溝を伝うて、二人、三人、胡乱々々(うろうろ)する。

この時であった。

夜(よ)も既に、十一時すぎ、子(ね)の刻か。――柳を中に真向いなる、門(かど)も鎖(とざ)し、戸を閉めて、屋根も、軒も、霧の上に、苫掛(とまか)けた大船のごとく静まって、梟(ふくろ)が演戯をする、板歌舞伎の趣した、近江屋の台所口の板戸が、からからからと響いて、軽く辷(すべ)ると、帳場が見えて、勝手は明(あかる)い――そこへ、真黒(まっくろ)な外套(がいとう)があらわれた。

背後(うしろ)について、長襦袢(ながじゅばん)するすると、伊達巻(だてまき)ばかりに

羽織という、しどけない寝乱れ姿で、しかも湯上りの化粧の香が、月に脈うって、ぽっと霧へ移る。……と送って出しなの、肩を叩こうとして、のびた腰に、ポンと土間に反った新しい仕込みの鯔（ぼら）と、比目魚（ひらめ）のあるのを、うっかり跨（また）いで、怯（おび）えたような脛（はぎ）白く、莞爾（にっこり）とした女が見える。

「くそったれめ。」

見え透いた。が、外套が外へ出た、あとを、しめざまに細（ほっそ）りと見送る処を、外套が振返って、頬ずりをしようとすると、あれ人が見る、島田を揺（ふ）って、おくれ毛とともに背いたけれども、弱々となって顔を寄せた。

これを見た治兵衛はどうする。血は火のごとく鱗(うろこ)を立てて、逆(さかさま)に尖(とが)って燃えた。

途端に小春の姿はかくれた。

あとの大戸を、金の額ぶちのように背負(しょ)って、揚々として大得意の体(てい)で、紅閨(こうけい)のあとを一散歩、贅(ぜい)を遣(や)る黒外套が、悠然と、柳を眺め、池を覗(のぞ)き、火の見を仰いで、移香(うつりが)を惜気(おしげ)なく、酔(えい)ざましに、月の景色を見る状(さま)の、その行く処には、返咲(かえりざき)の、桜が咲き、柑子(こうじ)も色づく。……他(よそ)の旅館の庭の前、垣根などをぶらつきつつ、やがて総湯の前に近づいて、いま店をひらきかけて、屋台に鍋(なべ)をかけようとする、夜(よ)なしの饂飩屋(うどんや)の前

に来た。

獺橋（かわうそばし）の婆さんと土地で呼ぶ、――この婆さんが店を出すのでは……もう、十二時を過ぎたのである。

犬ほどの蜥蜴（とかげ）が、修羅を燃（もや）して、煙のように颯（さつ）と襲った。

「おどれめ。」

と呻（うめ）くが疾（はや）いか、治兵衛坊主が、その外套の背後（うしろ）から、ナイフを鋭く、つかをせめてグサと刺した。

「うーむ。」と言うと、ドンと倒れる。

獺橋の婆さんが、まだ火のない屋台から、顔を出してニヤリとした。串戯（じょうだん）だと思ったろう。

「北国一だ――」

と高く叫ぶと、その外套の袖が煽って、紅い裾が、はらはらと乱れたのである。

九

――「小春さん、先刻の、あの可愛い雛妓と、盲目の爺さんたちをここへお呼び。で、お前さんが主人になって、皆で湯へ入って、御馳走を食べて、互に慰めもし、また、慰められもするが可い。

治兵衛坊主は、お前さんの親たち、弟に逢った事は

ないか。――なければそれもなお好都合。あの人たちに訳を話すと、おなじ境界（きょうがい）にある夥間（なかま）だ、よくのみ込むであろうから、爺さんをお前さんの父親、小児（こども）を弟に、不意に尋ねて来た分に、治兵衛の方へ構えるが可（よ）い。場合によれば、表向き、治兵衛をここへ呼んで逢わせるも可（よ）かろう。あの盲（めし）いた人、あの、いたいけな児（こ）、鬼も見れば角がなごむ。――心配はあるまいものの、また間違（まちがい）がないとも限らぬ。その後難（こうなん）の憂慮（うれい）のないように、治兵衛の気を萎（なや）し、心を鎮めさせるのに何よりである。

私は直ぐに立って、山中へ行く。

わざとらしいようでもあるから、別室へと思わぬでもなけれど、さてそうして、お前は爺さんたちと、ここに一所に。……決して私に構うなと言った処で、人情としてそうは行くまい、顔の前に埃が立つ。構わないにしても気が散ろう。

泣きも笑いもするがいいが、どっちも胸をいためぬまで、よく楽み、よくお遊び。」——

あの陰気な女中を呼ぶと、沈んで落着いただけに、よく分って、のみ込んだ。この趣を心得て、もの優しい宿の主人も、更めて挨拶に来たので、大勢送出す中を、学士の近江屋を発程ったのは、同じ夜の、実は、

八時頃であった。
勿論、小春が送ろうと言ったが、さっきの今で、治兵衛坊主に対しても穏(おだやか)でない、と留めて、人目があるから、石屋が石を切った処、と心づもりの納屋の前を通る時、袂(たもと)を振切る。……

お光が中くらいな鞄(かばん)を提げて、肩をいからすように、大跨(おおまた)に歩行(ある)いて、電車の出発点まで真直(まっす)ぐに送って来た。
道は近い、またすぐに出る処であった。
「旦那さん、蚤(のみ)にくわれても、女(あま)ッ子は可哀相だと言っ

たが、ほんとかね。」

停車場(じょう)の人ごみの中で、だしぬけに大声でぶッつけられたので、学士はその時少なからず逡巡しつつ、黙って二つばかり点頭(うなず)いた。

「旦那さん、お願だから、私に、旦那さんの身についたものを一品(ひとしな)下んせね。鼻紙でも、手巾(ハンケチ)でも、よ。」

教授は外套を、すっと脱いだ。脱ぎはなしを、そのままお光の肩に掛けた。

このおもみに、トンと圧(お)されたように、鞄を下へ置いたなりで、停車場を、ひょいと出た。まさか持ったなりでは行くまいと、半ば串戯(じょうだん)だったのに――しかし、

停車場を出ると、見通しの細い道を、いま教授がのせたなりに、ただ袖に手を掛けたばかり、長い外套の裾をずるずると地に曳摺（ひきず）るのを、そのままで、不思議に、しょんぼりと帰って行くのを見て、おしげなくほろりとして手を組んだ。

発車した。

――お光は、夜（よ）の隙（ひま）のあいてから、これを着て、嬉しがって戸外（おもて）へ出たのである。……はじめは上段の間へ出向いて、

「北国一。」

と、まだ寝ないで、そこに、羽二重の厚衾（あつぶすま）、枕を四つ、頭あわせに、身のうき事を問い、とわれ、睦言（むつごと）のように語り合う、小春と、雛妓（おしゃく）、爺さん、小児（こども）たちに見せびらかした。が、出る時、小春が羽織を上に引っかけたばかりのなりで、台所まで手を曳いた。――ああ、その時お光のかぶったのは、小児の鳥打帽であったのに――

黒い外套を来た湯女（ゆな）が、総湯の前で、殺された、刺された風説（うわさ）は、山中、片山津、粟津、大聖寺（だいしょうじ）まで、電車で人とともに飛んでたちまち響いた。

けたたましい、廊下の話声を聞くと、山中温泉の旅

館に、既に就寝中だった学士が、白いシイツを刎(は)ねて起きた。

寝床から自動車を呼んで、山代へ引返して、病院へ移ったという……お光の病室の床に、胸をしめて立った時、

「旦那さん、――お光さんが貴方(あなた)の、お身代り。……私はおくれました。」

と言って、小春がおもはゆげに泣いて縋(すが)った。

「お光さん、私だ、榊だ、分りますか。」

「旦那さんか、旦那さんか。」

と突拍子な高調子で、譫言(うわごと)のように言ったが、

「ようこそなあ——こんなものに……面（つら）も、からだも、山猿に火熨斗（ひのし）を掛けた女だと言われたが、髪の毛ばかり皆（みんな）が賞（ほ）めた。もう要らん。小春さん。あんた、油くさくて気の毒やが、これを切って、旦那さんに上げて下さんせ。」

立会った医師が二人まで、目を瞬（しばたた）いて、学士に会釈しつつ、うなずいた。もはや臨終だそうである。

「頂戴しました。——貰ったぞ。」

「旦那さん、顔が見たいが、もう見えんわ。」

「さ、さ、さ、これに縋らっしゃれ。」

と、ありなしの縁（えん）に曳かれて、雛妓の小（こ）とみ、弟が、

かわいい名の小次郎、ともに、杖まで戸惑いしてついて来て、泣いていた、盲目（めくら）の爺さんが、竹の杖を、お光の手に、手さぐりで握らせるようにして、

「持たっしゃれ、縋らっしゃれ。ありがたい仏様が見えるぞい。」

「ああい、見えなくなった目でも、死ねば仏様が見られるかね。」

「おお、見られるとも、のう。ありがたや阿弥陀（あみだ）様。おありがたや親鸞（しんらん）様も、おありがたや蓮如（れんによ）様も、それ、この杖に蓮華の花が咲いたように、光って輝いて並んでじゃ。さあ、見さっしゃれ、拝まっさしゃれ。なま、

なま、なま、なま、なま。」
「そんなものは見とうない。」
と、ツト杖を向うへ刎（は）ねた。
「私は死んでも、旦那さんの傍（そば）に居て、旦那さんの顔を見るんだよ。」
「勿体ないぞ。」
と口のうちで呟（つぶや）いて、爺（おやじ）が、黒い幽霊のように首を伸（のば）して、杖に縋って伸上って、見えぬ目を上（うわ）ねむりに見据えたが、
「うんにゃ、道理（もっとも）じゃや。俺（おら）も阿弥陀仏より、御開山より、娘の顔が見たいぞいの。」

と言うと、持った杖をハタと擲（な）げた。その風采（ふうさい）や、さながら一山（いっさん）の大導師、一体の聖者のごとく見えたのであった。

大正十二（一九二三）年一月

底本：「泉鏡花集成7」ちくま文庫、筑摩書房
1995（平成7）年12月4日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十二巻」岩波書店
1940（昭和15）年11月20日第1刷発行
入力：門田裕志
校正：今井忠夫
2003年8月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。